

## 仏様のおはなし新シリーズ第53集その1 「本願を信じ念仏申さば佛になる」

あるご門徒の通夜の勤行に行った時のことでもあります。母の遺書ができてきましたと言つて息子さんが私に渡してくださいました。

息子さんといつてもすでに七十歳に手が届こうとする人です。門徒の方でありましたが、大人しい、口数の少ない方でありました。寺の玄関で出会ひしても、会釈程度で、すぐに本堂に行つて念仏申されているような、そんな御方でありました。享年九十五歳でした。私の寺で前住職がお説教の会をする時には、欠かさず出席されていました。

お説教の後の座談会の時でも、とりたてて、質問をされる事もない、目立たない物静かな方でありました。私が大学を出て、今の寺に帰つてきたら、すでに寺に出入りされていたので、もうかれこれ三十年以上のお付き合ひになつておりました。そのお母さんは、私の寺ばかりでなく、各地の浄土真宗のお寺のお説教にご縁をむすばれておられたようでした。何度か福岡組の降誕会の席にも、お見かけしたことがありました。殆ど自分の事は、お話されることがありませんでしたので、私的な事は一切分かりませんでした。ただ、いつも寺に来ては、お念仏を静かに申して帰つていかれる方でした。

遺書には次の様に書いてありました。

『私にもしものことがあつても心配しないで下さい。私を思う事があれば南無阿弥陀仏と仏様に手を合わせて下さいね。私のお願いです。仏法の本は捨てることのない様に貴方達も読んで下さいね。私を縁として聞法して下さいね。仏法を聞かしていただくことと自己が分かるようになりますよ。私の様な者が仏法を聞く身にならしてもらつたことは実に不思議です。遠き縁のあつた事をしみじみと喜んでおります。生まれがたき人間に生まれさせてもらつたので、若い時に仏法を聞かしていただきなさい。年を取つては頭が鈍くなります。』

それ以来、この遺書はいつも私の手元にあります。このお母さんは仏様となり、常に念仏申して下さいと語りかけて下さいます。

天神三丁目 光圓寺住職 圓日耕也でした。

